新たな事業分野の開拓への取り組み

～ベンチャー精神がたゆまぬ革新を支える住吉金属株式会社～

企業振興課　高見幸嗣

企業名	住吉金属株式会社	代表者	代表取締役 荒井脩二
事業内容	金属プレス加工など		
資本金	１０百万円	従業者	２１名
住所	大阪府富田林市中野町東	ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ	http://www.sumitec-j.com/

主原料となる天然鉱物

ダイオキシン抑制剤

はじめに

経営のグローバル化の進展は、わが国における大手製造業と受注下請型中小製造業（以下「中小企業」という。）との関係に大きな変化をもたらしています。なかでも、大手製造業の海外進出と原材料や部品等の現地調達は、国内の下請市場規模を縮小させ、中小企業の経営環境を厳しいものにしています。このことは、これからの中小企業は、過去の取引実績などに関係なくその技術・開発力やコスト競争力などにより取引先から選別されることを意味し、自らが変化しない限り市場に止まることは困難になるであろうことを示唆するものです。また、これまでは優位性を保っていた技術であっても海外企業の追い上げが急であるため、現在の取引が今後も継続されるという保証は何処にもありません。

このような環境あるいは背景から、ほとんどの中小企業は「脱下請」あるいは「自立」の方向を目指されるのですが、そこには製品開発や販売、それに資金などに関する大きなリスクが存在しており、その実現には数多くの困難が伴います。

これらの困難を克服する方法は企業により異なりますが、本稿では経営者自らが先頭に立ち自立への道を着実に進んでおられる住吉金属株式会社（以下「当社」という。）の取り組みを紹介したいと思います。

企業の概要

当社は昭和11年の創業以来、プレス加工を基幹に事業展開してきた企業です。当初は玩具や雑貨関係のプレス加工をしていましたが、現在ではモーター関連部品など電気・機械関連のミクロン単位の精密プレス加工を行うようになっています。

また、事業内容もプレス加工だけではなく金型製作から組立に至るまで、事業分野は電気・機械関連や素材や健康関連まで拡がっていますが、コア技術はあくまでプレス加工との認識のもと技術力の向上が図られてきました。

革新を支えるベンチャー精神

当社の精密プレス加工技術は得意先から高い評価を受け取引は拡大しましたが、主力得意先に対する売上の割合がある時期に80%以上に達したことをキッカケに自立への道を探ることになりました。
この時、社長は特定の得意先に対してあまりにも依存度を高めることは事業運営の不安定さを増大させ経営の自立性を弱める危険を有することを感じ、下請加工以外の事業の柱を育てるべく、新たな事業分野の開拓に取り組み始めたのです。
当社は経営理念の一つに『ベンチャー精神をもち、たゆまぬ革新を続ける。』をあげているように、もともと挑戦的な気風を大切にするところがありました。「ただ一生懸命やっているだけです。新しいことを前向きにやる。常に自己改革、会社改革をやっていかなければ生き残れない時代になっています。」との社長の言葉は、当社のベンチャー精神の一端を覗わせるものです。
新たな事業分野の開拓への取り組み以降、数多くの製品が開発されましたが、商品として販売されたのはわずかで、あとのほとんどは販売にまで至らなかったり開発やアイデア段階で消滅してしまったそうです。それでも、わずかであってもそれらの商品は着実に当社の自立への芽となって育っています。例えば、ＬＥＤを使用したサイン灯「ピカ子」は郵便局の表示板や英会話教室の看板などに採用され、空気清浄機やエアータオル、それに抗菌性セラミックなども市場性のある商品となったのです。

新たな発想を生む人的ネットワーク

ビジネスチャンスを追いかけ挑戦するという社長の姿勢こそが当社の自立を確かにする大きな要因であることは明白ですが、一般的にはこのビジネスチャンスを見つけることが大変な場合がほとんどです。
社長は「今では色々な話を沢山の人から持ちかけられるようになりました。」と、人を通じて多くのビジネスのアイデアやヒントが得られていると言われます。
社長は17～18年前から異業種交流会や各種の会合に積極的に参加して様々な人との関係を築かれたそうです。今は異業種交流会などには参加されていませんが、「話しがあれば、とりあえず会ってみます。」「相談をされれば、自分ができなくてもネットワークを使って紹介するなどの返答を必ずします。」との姿勢は信頼関係を深めるとともに、人と人の繋がりの輪をさらに大きくしているようです。
「とにかくがむしゃらに動いているだけです。」と言われていますが、これが新たな発想を生む主要な源泉となっているのは確かです。

コア技術を磨く

「コア技術はプレス加工です。新たな事業の柱の育成を進めてはいますがそれは全体の3分の１程度の売上でいいと思っています。」とプレス加工によるモノづくりにこだわってお

られます。それは、今の時代は一つのことに特化して特徴を持たなければ生き残れないという思いがあるためです。
　技術や技能は絶えず向上させることが必要で、そのためには常に新たな課題を見出し、その解決にあたっては出来ないと言うのではなく、やるためにはどうするという発想をすることが大切です。皆が少しずつ改善を積み重ねそれを共有する過程で技術や技能はより磨き上げられ伝承されるのです。」と技術・技能の向上はモノづくりを離れては考えられないこと、その伝承もモノづくり通じて実施されること、日々の革新への取り組みが重要であることを熱く語られています。

新たな事業分野の開拓に向けて

　当社が新たな事業の柱として最も注力しているのは『ダイオキシン類の発生が抑制される塩化ビニル樹脂の開発』です。プラスチックを焼却すると強い毒性をもつダイオキシンが発生しますが、当社では、用瀬電機（株）、大貴工業（株）、府立産業技術総合研究所、立命館大学と共同で汎用樹脂である塩化ビニルをどのような条件下で焼却処理してもダイオキシン類の発生が抑制され環境への負荷軽減にもつながる添加剤の開発に取り組んでいるのです。
　この添加剤の開発は、経済産業省の「即効型地域新生コンソーシアム研究開発事業」にも採択され、各方面からも注目されているものです。現在は、実験段階を終え実用化のための幾つかの課題解決に向けた地道な努力が続けられているところで、その成果が待たれているものです。
　ちなみに、この計画も用瀬電機（株）と当社の両社長が大手家電の協力企業の会合で知り合い、意気投合したことが縁で進められたものです。

おわりに

　「今の時代、自社及び自社を取り巻く環境について考えると、良いことは数える程しかありませんが、悪いことなら幾らでも言えます。しかし、そういって暗くなっているのではなく、より前向きな姿勢で積極的に今後を切り拓いていくことが大切だと思っています。」そして「全てを社で出来る時代ではありません、互いに力を出し合い助け合っていけばいいのではないでしょうか。」と、中小企業の積極性と共生の必要性を語っておられました。

　最後になりましたが、今回の事例紹介にあたり、お忙しいなかインタビューに快く、しかも長時間にわたって応じていただきました荒井社長に感謝いたしますとともに厚く御礼申し上げます。